



◆当面する重点作業について

1. 降雪で枝が折れないように主枝亜主枝を中心に支柱立てを行う。
2. 2月下旬～3月下旬にかけて、耐凍性が消失する時期に当たるため、急激な寒の戻りに遭遇すると凍害の発生が心配されるため、防寒対策の見直しを行う。(ワラまき・白塗剤の塗布など)
若木の剪定は、できるだけ春に近づいてから実施する。
3. せん定作業では脚立はすべりやすいので、足場をしっかりと踏んで固定してから作業を行う。
剪定の切り口は、必ずトップジンMペーストなど塗布剤を塗布する。
4. リンゴハダニや越冬害虫防除のため、第1回目の散布前に粗皮削りを行う。
5. 園内を巡回し、腐らん病の早期発見、早期治療に努める。
6. ネズミ対策として、雪解け後の食料が少ない時期は効果が高いので「ヤソヂオン」を使用し、ネズミの数を減らす。

◆りんご花芽状況について

長野地域では健全花芽率は59%であり、花芽は概ね確保されている状況です。しかしながら、横径3mm以下の芽も多いため、充実した花芽をしっかりと確保する事が重要です。

◆褐斑病・黒星病対策について

近年、褐斑病の発生が増加している。被害葉は、当年の発生源になるため、焼却処分・耕運（黒星病のみ）や、土中に埋めるなどの対応を実施し、菌密度を減少させる事が重要です。

◆腐らん病対策について（重要）

腐らん病の発生が目立っています。地域的に蔓延すると大きな被害になることが予想されます。一丸となって対策を徹底し、腐らん病の増加を防ぎましょう。

1. 腐らん病とは
カビ（糸状菌）による病気です。特徴は以下の2つ。
 - 1) 主な感染部位は傷口
自然条件で起きる凍害や風による枝折れのほか、管理作業で発生する摘果や収穫時の果台痕、せん定痕など。
 - 2) 伝搬を担う胞子は一年中飛散

傷ができるせん定後、摘果後、収穫後が主な

感染時期＝「重点的な対策が必要な時期」

2. なぜ、今増えているのか
以下の点が増加に影響している可能性あり。
 - 1) 病勢進展が早く、重篤化しやすい「わい化栽培」の増加。
 - 2) せん定時期が早まっている。
 - 3) 「ふじ」は摘果後の果台が脱落しにくく、枝腐らんに進展しやすい。



4) りんご生産の大規模化や高齢化が進み、対策が徹底できない。
 伝染性の病気なので、何らかのきっかけで増加傾向になると、多くの伝染源が生み出され、さらに多くの発生を引き起す。病気は「直線的」ではなく「指数的」に増える。
 増加を実感できる状態は大きな波が押し寄せているとき。
 新型コロナ感染症で経験したように、対策を強化しないと波は次々と大きくなり、被害も大きくなる。

今が手を打つべき時です！

3. 対策：伝染源の除去

1) 枝腐らんのせん除

枝腐らんは見つけ次第せん除！！。

展葉～開花ころから見つけやすくなります。摘果時にハサミやノコギリを持たない場合は、ビニールひもを持って、しるしをつけましょう。

病原菌は枝の表面よりも内部に広く存在するので、健全な枝や葉そうを複数含めて長めにせん除してください。

2) 胴腐らんの処置

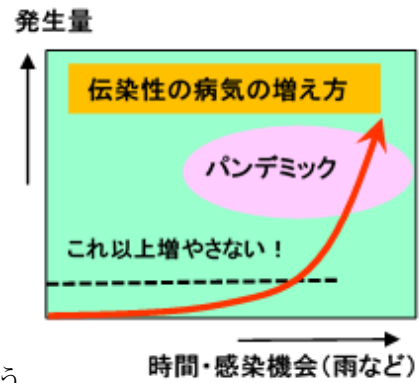
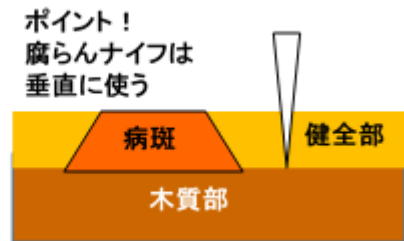
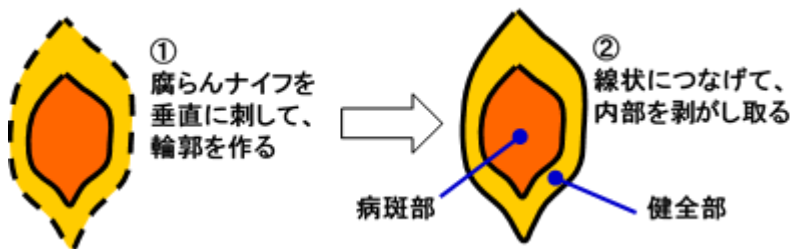
病斑が主幹外周の半分以上に進展している場合は伐採を検討してください。

①削り取る病斑の下にシートを敷き、削り取った病斑を回収できるようにする。

②病斑の周辺を軽く削り、病斑の大きさを確認する（この部分に病原菌が存在）。病斑は表面よりも内部の方が広い範囲に及んでいる。

③削り取りは専用の腐らんナイフ（腐らん削り）がおすすめ。

- ・削り取る輪郭に破線状に腐らんナイフを垂直に挿し、紡錘形にしるしをつける。
- ・しるしを線状につなげると、内側の病斑部を剥がし取ることがきる。



長野農業農村支援センターで、有効な防除対策の一つである「樹皮の削り取り」動画を作成しました。こ

の動画を参考にいただき、処置を実施しましょう。https://youtu.be/9LLtcCQ3Tvc

4. ポイント：伝染源除去にあたって

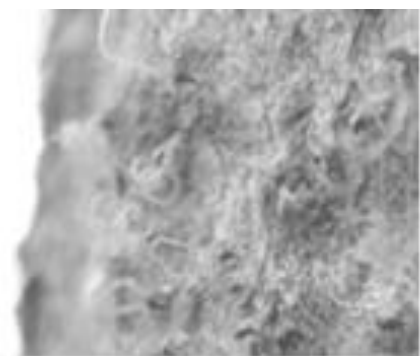
1) 園内の点検

樹体に傷を作る摘果作業の前には、園内の点検を行いましょう。

展葉～開花期は腐らん病が目立ち始める時期です。
 展葉～開花期、摘果前は一斉点検を実施しましょう。
 地域で行うと効果的です。

2) せん除した枝、削り取った罹病部の処置【重要】

絶対に園内に放置しないでください。雨にあたるなど、水分があると胞子を形成して飛散させます。焼却するか土中に埋めてください。なお、法に基づき、やむを得ず焼却を行う場合は、苦情が出ないよう周辺環境に十分配慮してください。すぐに処分できない場合は、シートをかけて雨が当たらないようにしてください。



削り取った病斑も胞子を形成
 (黄色い糸状の胞子)

5. ポイント：せん定の順番

休眠期は樹体の防御機能が働かないため無防備です。近年、降雪量が少ない、経営規模の拡大等の理由から、せん定期が早まっていますが、無防備な期間が長くなり、感染リスクが高まります。また、早いせん定は傷（せん定痕）ができてから春の薬剤散布までの期間が長くなるので、感染リスクが高まります。せん定には次の点に留意しましょう。

- 1) 他の樹種（もも、ぶどう、なし）がある場合は、りんごのせん定を最後にする。
- 2) りんご園の中でも、腐らん病の発生がみられる園、多い園のせん定は最後にする。

腐らん病に特效薬はありません。地域一丸となった「伝染源の除去」が重要です。
潜伏期間が長いため、対策の効果を実感できるのは2～3年後です。
地域のりんごを守るため、根気強い「腐らん病対策」をお願いします。

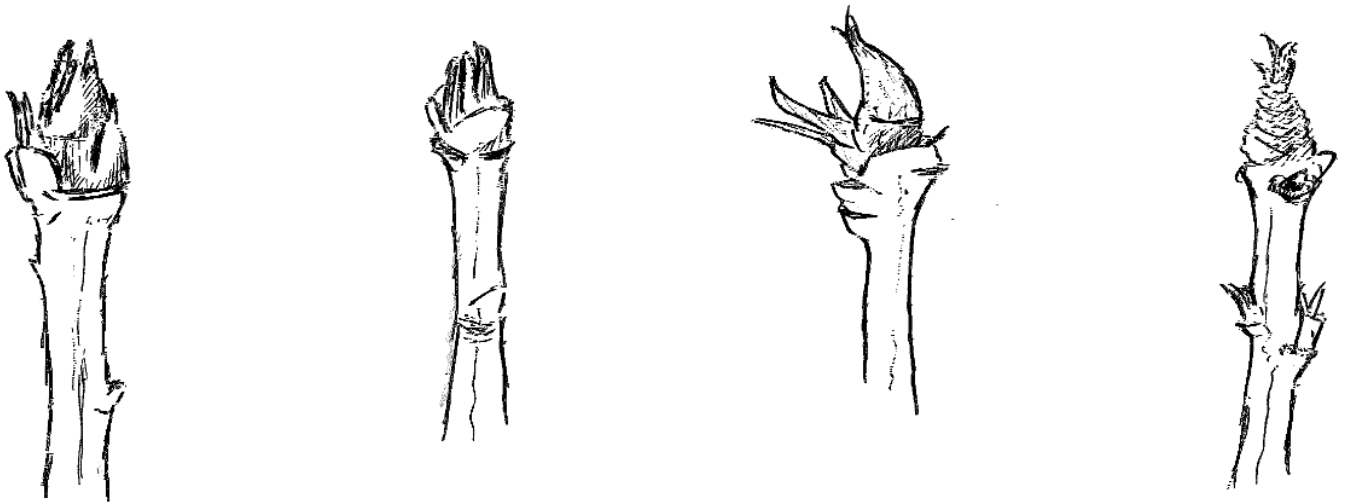
（引用：長野農業農村支援センター～りんご生産者の皆様へ～）

◆うどんこ病の被害枝の除去について

紅玉・つがる・シナノスイートでの発生が多く、隣接するふじにも多く散見される。

重要な対策は、「被害枝」の除去となる。「被害枝」を発芽させてしまうと、伝染源となるため、薬剤防除の効果が出にくくなる。

花芽をよく確認するし、図の様な枝は、必ず発芽前に先刈りする。なお、感染部は目に見える部位だけではないため、被害部位より2～3芽程度多めに切る。



◆高密植（新わい化）栽培の管理について

1. 時期

- 1) 落ち着かせたい場合の剪定の適期は4月～5月になる。
- 2) 強樹勢の場合は、冬期剪定の必要性が無く、凍害の危険性が増すだけとなる。
- 3) 近年は弱樹勢の傾向が見られるため、樹勢の弱い場合は3月に剪定を行う。
また施肥量を増やし、早期の摘果と着果制限で樹勢を回復させる。

◆性フェロモン剤取り扱いについて《重要》

りんご、ももネクタリン、プルーン等は、性フェロモン剤設置を前提とした、防除暦となっています。予約注文忘れた方は、各 JA ファーム店、資材センター、経済課まで、ご相談ください。当用注文対応可能です。